

## みやぎ心のケアセンターと災害時の支援のあり方を考える

基幹センター・企画課

精神保健福祉士 渡部 裕一

みやぎ心のケアセンターは、東日本大震災から約9か月後となる2011年12月1日、仙台市内の基幹センター設立によってスタートした。翌年2012年4月からは気仙沼地域センターと石巻地域センターが開所、県下全域を対象として本格的に稼働することとなった。東日本大震災による心理的影響を受けた方々が、一日も早く安心した生活を取り戻せるよう、岩手県、福島県に先駆けて東北では初めて設置されたものである。私たちはいわゆる連合チームで、精神科医、保健師、精神保健福祉士、臨床心理士などの多職種によって構成されている。私のように民間機関から出向している者、ここで社会人としてのスタートを切った者、震災後にはじめてこの宮城を訪れた者など、これまでの経歴も多様である。また震災当日も津波に直面してしばらく身動きすら取れなかったという者、海外から映像でのみ惨状を確認したという者まで距離感もさまざま。しかし、個々の職員が心突き動かされ、それまでの日常を投げうって集結したという熱意は共通しているように思う。

センターの事業は主として①普及啓発、②住民支援、③支援者支援、④人材育成、⑤各種活動支援、⑥調査研究の6項目から成り立つ。それぞれ重要な意味合いを有するが、とりわけ「③支援者支援（支援に携わっている方々に対しての支援）」の必要性を強く感じている。保健師をはじめとする市町村担当者は、被害に遭われた住民の皆さんへの対応に追われながら、外部からの支援もコーディネートし、その狭間で奮闘されてきた。また震災後に仮設住宅等で支援に携わっている「生活支援相談員」の皆さんも、慣れぬ立ち位置に戸惑われながら、同じ地域に暮らす人々の一助になりたいと日々尽力されている。そういった地域の人々の想いを直に受け止めている方々を少しでも後方支援することが、ひいては住民の方々への支援の充実につながるものと私たちは考えている。

あの震災からすでに1年半。AKB48の総選挙の結果が、幅広い世代の話題として取り上げられたかと思えば、ロンドン五輪でのメダルラッシュに人々は昼夜を忘れて高揚する。地元宮城でもベガルタ仙台の躍進など、巷には明るい話題が溢れ、ともすると震災は過去のものなのである。しかし何かの折、当時のことが話題になると人々の蓋をしていた感情は涙と共にあふれ出し、かけがえのないものを失った悲しみ、何かをやり遂げられなかったという後悔の念が去来する。そう、私たちは消化しきれなかったさまざまな類の「不全感」をそのままに、あの日からの日常をこなしている。時々蓋を開けながらも、しかしいつか、大切な記憶に穏やかな気持ちで触れられる日が訪れることを今はただ静かに願いたい。この地の記録に残る何度かの津波、そしてあの戦災という経験を人々がそうして乗り越えてきたように。

今回の災害では職種・業種を問わず全国から本当に多くの支援者が訪れ、私たちの生活を支えてくれた。また、兵庫県や新潟県における災害の教訓は、未曾有の災害の真只中にあって先の見えない私たちの道先を照らしてくれた。遠方から駆け付けてくれた多くの皆

さんには心の奥底から感謝の意を表したい。しかし悲しいかな、早くも南海トラフの話題がメディアで取り上げられているように、次なる災害がどこかで起こり得ることは明らかである。この教訓を私たちはどれだけ未来に生かせるかが試される。決して支援者の思いや思惑が先行する「支援者のための支援」であってはならない。まずは当事者ニーズありき。そして、あくまで謙虚に、歩調を合わせて歩む姿勢を大切にしたい。何を今さらと思われるだろうか。しかし、復興さ中で得た教訓として、改めてそんな当たり前の姿勢こそ、非常時に失われやすいものであることを強調したい。

(心とこころ NO. 50 『明日に向かって』～震災後のメンタルヘルス～ 社団法人宮城県精神保健福祉協会編集発行平成 24 年 11 月号に収録)